

早稲田大学大学院日本語教育研究科

博士論文概要

論文題目

因果関係を表す接続表現の日中対照研究

申請者

新田小雨子

2007年9月

因果関係を表す接続表現の日中対照研究

1. 研究目的

本研究は、日本語と中国語の因果関係を表す複文における接続表現（日本語の接続表現または中国語の“关联词语”）について、対照研究の立場から、いくつかの観点に着目し考察を行うものである。日本語の因果関係を表す複文においては、接続表現が必須の成分になっているのに対して、中国語の因果関係を表す複文においては、接続表現を使用する場合と使用しない場合がある。

- | | |
|--------------------------|------|
| (1) 吾輩は日本の猫だから無論日本最負である。 | 『吾』 |
| 在下是只日本猫儿，所以多少也有些爱国心。 | 《我②》 |
| (2) 私はあまりおそろしくて、がたがた震えた。 | 『斜』 |
| 我听了觉得很可怕，浑身嗦嗦发抖。 | 《斜》 |

中国語では、(2)の訳文のように、接続表現が使用されていないケースが極めて多い。しかしながら、このような現象を単なる一つの言語の特徴と断定するには説得力に欠ける。中国語の因果関係を表す複文においては、接続表現を使用したり、省略したりする場合もあるため、接続表現の使用は自由度が高い。しかしながら、因果関係を表す表現を使用しない場合、その理由は他にもある。そもそも因果関係を表す複文に関する認識が日本語と異なっているのではないかと筆者は考える。つまり、日本語では因果関係を表す複文として扱うが、中国語では因果関係を表す複文として扱えないといったずれが存在しているということである。

また、接続表現の機能との関係もあると思われる。日本語では、節と節をつないでいく時には、接続助詞を用いるが、文と文をつないでいく場合は、接続詞を用いる。これに対して、中国語では節と節をつなぐものと、節レベルを越えた文と文をつなぐものとがほとんど同じであるため、因果関係を表すものはロジック性や説明性が強い。このような特徴があるため、場合によっては、接続表現を用いず、“意合法”によって前後節の意味関係が表現されるため、接続表現が省略される要因のひとつとなっている。

2. 論文の構成

本研究は序章から9章までの全10章から構成されている。各章で行ったことを以下に示す。

序章	研究目的、対照研究の意義、研究課題、日本語教育における対照研究の意義、調査分析方法
第1章	先行研究と本研究の立場
第2章	接続表現の表現類型と因果関係の度合いとの関わり
第3章	接続表現の機能および使用範囲の異同
第4章	原因節の焦点化における両言語の異同
第5章	接続表現の使用と主語、述語動詞との関わり
第6章	因果関係を表す複文における接続表現の使用と時間表現との関わり
第7章	因果関係を表す複文における構文モデル
第8章	日本語教育への応用
第9章	結びと今後の課題

3. 各章における研究内容および結果

3.1 第1章（先行研究と本研究の立場）

第1章では、まず日本語の「条件文」と中国語の「主従複文」の分類、枠組みおよび両言語における因果関係を表す複文の位置づけについて見てきた。そして、日本語の因果関係を表す複文において、最も多用されている「から・ので」の意味機能の違いに関するところを取り上げた上、「から・ので・ため(に)・て」の機能的な違いに関する論述も取り上げた。先行研究を整理することによって、「て」、「ため(に)」、「から」、「ので」の使用範囲の違いがわかった。つまり、制約を受けやすければ受けやすいものほど、使用範囲も狭くなるということである。一方、制約を受けにくければ受けにくいほど、使用条件が緩やかになり、使用範囲も広くなるという結論が得られた。使用条件の厳しさと使用範囲の広さの2つの側面からみれば、「から」、「ので」、「ため(に)」、「て」はそれぞれの位置づけが決まってくる。これは【図1】のように図示できる。本文では【図4】になっている。



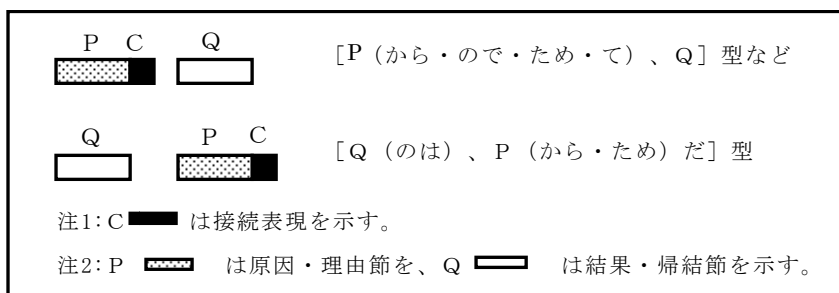
【図1】

本章では、さらに、中国語の因果関係を表す複文に関する先行研究を概観し、中国語における因果関係を表す複文に関する分類は、「説明因果複文」と「推断因果複文」の2種類に分けることが判明した。

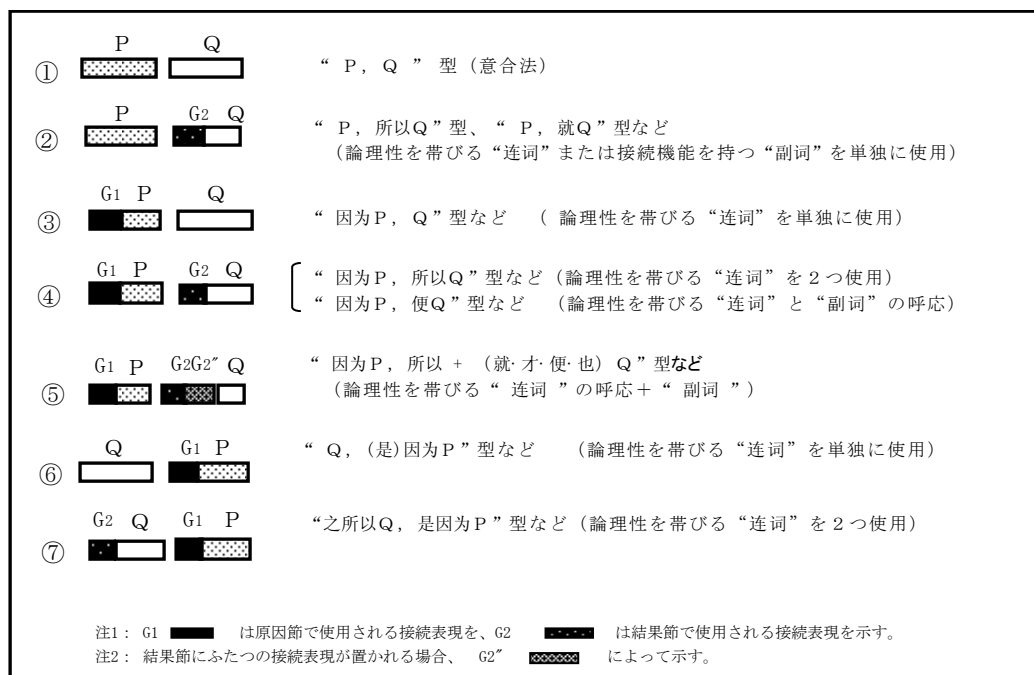
3.2 第2章（接続表現の表現類型と因果関係の度合いとの関わり）

第2章では、両言語の因果関係における接続表現の使用と因果関係の度合いとの関連性について、接続表現の機能、原因・理由を強調する要素の有無、構文順序（倒置文）といった点を視野に入れ、考察を行った。各節で行った研究内容は以下の通りである。

2.1節では、まず、日本語の「から・ので・ため(に)・て」を含む用例から観察された接続形式の類型について分類を行った。そして、日中対訳を通して得られた「から・ので・ため(に)・て」に対応する中国語表現を一覧表にまとめ、それに基づいて中国語の接続形式の類型についても分類を行った。両言語の接続形式の類型を【図2】と【図3】に示す。本文では【図7】【図8】になっている。



【図2】日本語の接続表現の表現類型



【図3】中国語の接続形式の表現類型

2.2 節では、日本語における接続形式の類型と因果関係の度合いとの関わりについて検討した。日本語が原文のものを用い、接続表現の機能、原因・理由を強調する要素の有無、構文順序の倒置といった点を視野に入れ考察を行った。

2.3 節では、中国語が原文の用例を用い、接続表現が使用されているかどうか、使用接続表現が因果関係を表すものであるかどうか、また使用接続表現の数が単数か複数か、原因理由を強調する要素があるかないかなどを究明するため、中国語における接続形式の類型と因果関係の度合いとの関わりについて検討を行った。

2.4 節では、2.2 と 2.3 で得られた結果をさらに裏付けるため、因果関係の度合いによる日中両語の対応関係について観察した。結果的には、中国語の因果関係を表す複文では、接続表現が省略されることが多いが、因果関係の度合いが強い日本語を中国語に訳す場合、原文の意味合いを的確に伝えようとするれば、接続表現だけではなく、他の文成分の手助けも借りて意味上の等価性を求めようとしていることがわかった。つまり、因果関係の度合いが強ければ強いほど、日中両語の対応性が高いということが明らかになった。

2.5 節では、2.2 と 2.3 の考察結果をまとめた上で、接続表現と因果関係の度合いとの関わりにおける両言語の相違点と類似点を記述した。結果的には、次のようなことを明らかにした。

日本語は前後節の因果関係の度合いが強いか否かを判断する場合、接続表現が因果関係を明示する機能を持つか否か、または原因節を強調する成分が使用されているか否か、構文順序がどうなっているかによって判断する。一方、中国語は接続表現が因果関係を表す機能を持つか否か、そして接続表現の数、強調成分の有無と数の多さ、構文順序によって判断する。

3.3 第3章（接続表現の機能および使用範囲の異同）

第3章では、日中両言語の因果関係を表す表現の使用範囲および機能の異同について記述した。本章は5節より構成されている。

3.1節では、両言語の因果関係を表す複文の枠組みについて、それぞれの先行研究を踏まえながら確認した上で、本章の研究の枠組みを確立した。日本語の因果関係を表す複文の枠組みが大きいということを考慮し、日本語の因果関係を表す複文の分類に基づき、本章の考察の進め方を決めた。

3.2節では、日本語におけるモダリティ要素が含まれない「単なる原因・理由を表す文」を8種に細分類し、それぞれ中国語との比較対照を行った。「から・ので・ため(に)・て」はそれぞれどのような原因・理由を表す文で使用されるかを考察し、「から・ので・ため(に)・て」の機能を明らかにした。そして、同じ特徴を持つ原因・理由文において、中国語の場合どのような接続表現が使用されるかを検討し、中国語の接続表現の機能も明確にした。

3.3節では、「推量・判断の根拠を表す文」における比較対照を行った。まず、この種の文において、日本語の接続表現の使用が許容されない場合があるかどうかについて検討した。そして中国語についても同様の考察を行った。

3.4節では、「発言・態度の根拠を表す文」について対照分析を行った。この種の文は、日本語では因果関係を表す複文の一種として扱うが、中国語では、因果関係を表す接続表現の使用が許容されないため、因果関係を表すものとして扱えるかどうかについて考察を行った。

3.5節では、3.2～3.4で行った比較対照を通して、両言語の接続表現の機能および使用範囲の異同をまとめた。

その結果、日本語の接続表現の機能は中国語より広く、表現内容の制約を受けにくいいため、多様な原因・理由を表せるということがわかった。たとえば「から・ので」については、事態原因、行為の理由、自然描写文、ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文、継起関係を伴う行為の理由文、発言・態度の根拠を表す文などで使用した場合、いずれも自然であり、意味合いも正確に伝えることができる。これに対して、中国語の接続表現は表現内容の制約を受ける傾向がある。前後節のニュアンスを正確かつ自然に聞き手や読み手に伝えようとすれば、典型的な“关联词语”の“因为、所以、因此”などのみでは、表現しきれない。

また、日本語の原因・理由を表す接続表現の使用範囲は中国語より広いということも明らかになった。日本語は文の性質の制約を受けず、因果関係を述べる典型的な文だけでなく、自然描写文、モダリティ形式と関係している文、感情評価の原因・理由文も因果関係の一種として扱え、因果関係を表す接続表現によって、前後節の意味関係が示されている。一方、中国語では接続表現の使用は、文の性質の制約を受ける場合があり、因果関係を表す複文として認めにくいものがある。日本語と同様の枠組みの中で、日本語では因果関係を表すものとして認められるが、中国語では因果関係を表すものとして認められにくいケースがある。特に自然描写文や感情評価の原因・理由文の場合は、日本語は自然現象の変化や、話者の強い気持ちが込められ、人またはものに対して評価する場合、そういった変化や評価の原因・理由について、接続表現によって明示されるが、中国語はそういった原因・理由を示さない。中国語では、それらの文にある因果関係を最大限に潜在化させ、論理関係を示すことより、真に迫るシーンを描き出すことや、話し手の気持ちを強く感じさせることを重視する。そのため、自然現象について描写する場合は、表面にある景色そのものに視点を置き、リアルに描出し、背後に潜在している形成原因が認識されないのが一般的である。感情評価の原因・理由文の場合は、話し手の気持ちを強く前面に押し出すことを重視し、そのような気持ちが生じた理由を最大限に潜在化させるというより、そもそも潜在している原因を認識しておらず、単なる一方的な状況説明だと捉えているといったほうが的確である。

3.4 第4章(原因節の焦点化における両言語の異同)

第4章では、因果関係を表す複文における原因節の焦点化について考察し、両言語の焦点化の表現形式および焦点マーカ―の位置の類似性と相違性を明らかにした。

4.1、4.2節では、焦点の定義や表現形式について記述した。

4.3節では、因果関係を表す複文における両言語の原因節焦点化の表現形式について述べた。

4.4節では、日中対訳例を用い、主節の「のだ」による原因節焦点化の場合と、構文の順序による原因節焦点化の場合において、両言語の対応関係について考察した。

4.5節では主節に疑問表現と推量表現が現れ、原因節が疑問のフォーカス、推量のフォーカスとなる場合の両言語の焦点の表現形式についても、実例を通して検討した。

結果としては、日本語には2種類の焦点の表現形式が見られた。そして焦点マーカ―の位置は固定されており、構文形式により焦点を表しているのが特徴だということがわかった。これに対し中国語表現では、焦点の表現形式は語彙によるものが多く、焦点マーカ―は原因節に置かれるものと結果節に置かれるもののいずれもあることがわかった。そして焦点マーカ―数はひとつに限定されず、焦点の表現形式は日本語よりバラエティに富んでおり、焦点マーカ―の使用が日本語より自由であることも分かった。結果を【表1】に示す。【表1】は本文では【表28】になっている。

【表1】日中両言語の原因節における焦点化の対応

日本語			中国語		
焦点の表現形式	焦点の位置	焦点マーカ―の位置	焦点の表現形式	焦点の位置	焦点マーカ―の位置
Pから、Qのだ	従属節	主節	P, 才Q (語彙)	従属節	主節
Pので、Qのだ			正/是GP, Q (語彙)	従属節	従属節
Pために、Qのだ			正/是GP, G才Q (語彙)	従属節	従属節と主節
Pて、Qのだ			是GP, G才Q的 (語彙+構文形式)		
Q、Pからだ(構文順序変換)	従属節	従属節	GQ, 是GP (構文順序変換)	従属節	従属節

注1: Gは中国語の接続表現を示す。

注2: Pは従属節(原因・理由)を表し、Qは主節(結果・帰結)を表す。

3.5 第5章（接続表現の使用と主語、述語動詞との関わり）

第5章では、接続表現の使用と主語および述語動詞との関わりについて論じた。日本語の因果関係を表す複文では、接続表現を用いる際に、主語の制約を受けたり、従属節の動詞の意志性の有無が関わってくる場合があるが、中国語では接続表現の使用は、それとは異なった制約を受ける場合もあると考え、以下の考察を行った。

5.1 節では、主語と述語の組み合わせについて、同一主語のものと異主語のものをそれぞれ4パターンずつ、合計8パターンに措定した。

5.2 節では、同一主語による構文パターンにおいて、両言語の接続表現の使用が、それぞれどのような制約を受けるかについて検討した。

5.3 節では、異主語による構文パターンにおいて、両言語の接続表現の使用がそれぞれどのような制約を受けるかについて考察を行った。

5.4 節では、5.2 と 5.3 の対照分析結果を通して、前述の8パターンにおいて両言語の接続表現使用時の制約の異同についてまとめて述べた。

結果としては、前後節が同主語または異主語のいずれの場合でも、両言語とも因果関係を明示的に述べる接続表現の使用は制約を受けにくい、因果関係を明示的に示す機能を持たない接続表現の使用は制約を受けやすいということがわかった。また、因果関係を明示する機能を持たない接続表現の使用に関しては、前後節が同主語の場合は、日本語の方が中国語より制約を受けにくく、前後節が異主語の場合は、中国語の方が日本語より制約を受けにくいということも明らかになった。さらに、中国語の接続表現の位置は主語と関係していることも判明した。前後節が同一主語であり、原因節に接続表現が使用される場合は、主語の前と後ろの何れにも置くことも可能であるが、主節に接続表現が使用される場合、主語の前に置かなければならないものと、主語の前と後ろのいずれにも置けるものの2種類があった。前後節が異主語の場合、主節の接続表現の使用位置が限定されるだけでなく、従属節に置かれる場合も主語の前でなければならない。

3.6 第6章（接続表現の使用と時間表現との関わり）

第6章では、因果関係を表す複文における接続表現の使用と時間表現との関係について論じた。日本語の因果関係を表す接続表現の使用は、述語のテンスの制約を受ける場合が

あるが、語形変化を持たず、テンスを持つか否かがまだ確認されていない中国語では、テンスの制約を受けることはなく、アスペクトの制約を受ける場合があると考え、以下の手順で考察を行った。

6.1 節では、先行研究を踏まえながら、両言語がそれぞれどのような時間表現と関わっているかを確認した。

6.2 節では、日本語の接続表現の使用とテンスとの関わりについて検討した。従属節と主節の述語のテンス形式によって、4パターンに分け考察を行った。接続表現の使用とテンスとの関連性を述べると同時に、各パターンにおける従属節と主節の時間関係にも注目した。

6.3 節では、中国語の接続表現の使用とアスペクトとの関わりについて検証した。アスペクトの分類と表現形式について述べた上で、因果関係を表す複文における従属節と主節のアスペクトの組み合わせによって、4パターンに分類した。各パターンにおける接続表現の使用について分析するだけでなく、アスペクトマーカの使用についても分析した。

6.4 節では、6.2、6.3 節の分析を踏まえながら、両言語の接続表現の使用と時間表現との関わり方をまとめた。

結果的には、両言語は時間表現との関わり方が異なっていると判明した。日本語の接続表現の使用は、テンスと関わっているのに対して、語形変化を持たず、テンスの体系がまだ確認されていない中国語はアスペクトと関わりがある。

日本語は、従属節のテンス形式が過去形であれば、接続表現の使用は制約を受けにくく、「から」「ので」「ため(に)」のいずれの使用も許容される。一方、従属節のテンス形式が基本形であれば、「から」「ので」の使用は当然許容されるが、「ため(に)」の使用は、従属節の述語の性質、または時間関係の順序によっては、許容されない場合がある。また、前後節の時間関係は従属節と主節のテンス形式または述語の性質によって異なってくることも明らかである。

中国語の場合は、従属節と主節におけるアスペクトの組み合わせは4パターンあり、各パターンにおいて接続表現の使用が制約を受けるか否かについて検討し、次のようなことが判明した。

因果関係のみを表す“所以”“因此”“因为”などはいずれのパターンにおいても用いることができるが、因果関係を表すと同時に継起関係も表す“于是”は主節のアスペクトの制約を受ける場合がある。“所以”“因此”“因为”などがアスペクトの制約を受けな

いのは、それらが静的因果関係と動的因果関係のいずれも表す機能があるからである。一方、“于是”が使用される場合、主節のアスペクトが「未然態」であれば許容されなくなる。それは、“于是”が動的因果関係を表す機能のみを持ち、静的因果関係を表せないからである。

3.7 第7章（因果関係を表す複文における構文モデル）

第7章では、因果関係を表す複文における構文モデルについて比較対照を行った。因果関係を表す複文の基本的な構造は、順行型の「原因→結果（ $P \rightarrow Q$ ）」構文と、逆行型の「結果←原因（ $Q \leftarrow P$ ）」構文の2種類あるのが日本語と中国語の共通点であるが、これらの基本的な構造から発展し、文を構成していく場合、両言語にさまざまなずれが生じることがある。

7.1節では、日本語の構文モデルを「順行型」と「逆行型」の2種類に大別した上で、原因節の構成に着目し、さらに細分類を行った。「順行型」構文モデルについての考察にあたっては、原因節間の関係を見るだけではなく、原因節の構成と、接続表現の機能との関わりにも注目した。「逆行型」構文モデルについて考察する際は、原因節が焦点化されることを考慮した上、各構文モデルにおける構文上の特徴と、接続表現の機能領域について考察を行った。

7.2節では、中国語の構文モデルを「順行型」「逆行型」「変形型」の3種類に大別して、7.1と同様に、さらに細分類を行った。「順行型」について検討する場合、原因節間の関係、接続表現の位置および機能領域に注目した。「逆行型」については、日本語と同様に構文順序による原因節の焦点化を考慮しながら、各構文モデルの特徴と、接続表現の機能領域に着目して考察した。「変形型」については、構文の特徴や構文の単位に注目して分析を行った上、取り上げた用例の日本語訳文を観察し、「変形型」構文モデルに対応する日本語の構文上の特徴についても記述した。

7.3節では7.1、7.2節の分析結果に基づき、各構文モデルにおける両言語の構文上の特徴、接続表現の使用上の制約などについてまとめ、対照分析一覧表を作成した。

結果としては、「順行型」の場合、日本語にある構文モデルは、中国語にもそれと対応できる構文モデルが見られるが、文を構成していく際、異なる制約を受けることがわかった。日本語は複数の節を羅列して原因節を構成する場合、原因を表す接続表現の機能を考慮し、

原因を明示的に示す機能を持たないものから明示的に示す機能を持つものへと構成していくのが特徴的である。これに対して中国語は、同じ条件で構文し、原因を表す接続表現が使用される場合、接続表現の位置や統一性を考慮しながら原因節を構成していく特徴がある。「逆行型」については、「順行型」と同様に相違点および類似点も見られるが、構文順序を変えることによって、原因節を焦点化させる機能をもつ接続表現の働きに関して、両言語に共通点があることが判明した。「変形型」については、中国語は複文として成立するが、日本語は複文レベルの構文としては成立せず、中国語の「変形型」構文モデルを日本語で表現しようとする、複文のフレームを越え、文の接続関係として表現するしかないという両者の相違点も明確にした。

3.8 第8章（日本語教育への応用）

第8章では、研究成果に基づき、中国語母語話者の日本語学習者にとっての因果関係を表す複文における習得上の問題点を指摘し、日本語教育への提案を行った。

8.1節では、中国語母語話者の日本語学習者を教授対象として、因果関係を表す接続表現に関する教授上の課題を提起した。

8.2節では、研究成果を踏まえて、中国語母語話者が日本語を学習する際、因果関係を表す接続表現の習得上の問題点を以下のように提示し、そういった難点が何に起因しているかについて分析を行った。

- ① 因果関係を表す複文に関する認識上の違いと接続表現の脱落との関連性
- ② 接続表現の機能への理解
- ③ 接続表現の使用と諸構文要素との関わりへの理解
- ④ 複数の原因節における接続表現の使用と接続表現の機能への理解

8.3節では、中国語母語話者が日本語を学習する際の因果関係を表す接続表現の習得上の難点を意識した上で、日本語の因果関係を表す接続表現の扱われ方の現状を知るために、日本と中国で出版された教科書、日本で出版された中国語母語話者の日本語学習者向けの解説書や教師用マニュアルなどを調査した。

8.4節では、教科書、参考資料における因果関係を表す接続表現の扱われ方の問題点を

次のように指摘した。

- ① 接続表現の提出順序への考慮の問題点
- ② 接続表現の意味機能に関する認識の違い
- ③ 用例の偏りと他言語との対応関係の認識の違い
- ④ 接続表現と構文諸要素との関連性への認識の不足
- ⑤ 複数の原因節における接続表現の使用への認識の違い

8.5節では、本研究の対照分析結果と、8.1～8.4までの記述を踏まえて、2つの側面から日本語教育への提案を行った。

- ① 教科書、解説書作りと学習者の母語への考慮の重要性
- ② 日本語教育現場における他言語に関する知識の必要性

4. 結論

本研究の結論に関しては、次の4つの側面から概括して記述した。

- ① 因果関係を表す複文に関する認識の違い
- ② 接続表現の使用上の制約
- ③ 接続表現の機能的な異同
- ④ 因果関係を表す複文におけるマーカ―の多様化、自由化の相違

4.1 因果関係を表す複文に関する認識の違い

両言語においては、因果関係を表す複文に関する認識の違いがある。このような違いは両言語の接続表現の使用範囲と、因果関係を表す複文の枠組みの異同が反映されている。日本語は、物事の発生・変化または行為、感情的な評価、感情の表明について述べる如何なる場合でも、発生・変化の原因、行為が行われる理由、そう評価する理由を認識し、接続表現を用いて示す。したがって、日本語の因果関係を表す複文のフレームワークは非常

に広い。しかしながら、日本語と同様なフレームワークで、中国語の因果関係を表す複文について検討してみると、日本語では因果関係を表す複文として扱われているものであっても、中国語では因果関係を表す複文として扱いにくいケースと、認識されにくいケースが存在する。このような特徴は、自然現象描写文や話し手自身の感情表明の原因・理由文、話し手の他人への感情的な評価・理由文、話し手の発言・態度の根拠文のいずれにも見られる。両言語の因果関係を表す複文に関する認識的な相違を【図4】に示す。本文では【図21】になっている。

【図4】日中の因果関係を表す複文に関する認識の違い

	因果関係文	並列文	感嘆文	その他
①事態原因を表す文	■			
②ネガティブな心理的要素を伴う行為の理由文	■			
③継起関係を伴う行為の理由文	■			
④自然現象変化と状態変化の原因・理由文		■		
⑤感情表明の原因・理由文	■			
⑥感情評価の原因・理由文			■	
⑦心理状態の変化を引き起こす原因・理由文	■			
⑧説明的な原因・理由文	■			
⑨原因を根拠に結果を推量判断する文	■			
⑩結果を根拠に原因を推量判断する文	■			
⑪発言・態度の根拠を表す文	■			

日本語では因果関係を表す複文として扱われる範囲が広い。(青色部分)

中国語では因果関係を表す複文として扱われる範囲が狭い。(黄色部分)
並列文や感嘆文などとして表現されるものがある。(灰色部分)
因果関係複文として認識されにくいものもある。(桃色部分)

4.2 接続表現の使用上の制約

日本語の接続表現は機能によって、2種類に大別できる。それは因果関係を明示するものと、明示しないものである。中国語の接続表現も同様に分類できるが、「静的因果関係」を表すものと、「動的因果関係」を表すものの2種類である。使用上の制約としては、日本語は形態を重視し、接続表現は従属節に後接しなければならないため、従属節の構文要素

への配慮が必要となる場合が多い。そして接続表現を用いる際、従属節のテンス形式がル形かタ形か、従属節の述語の性質が状態性述語か動作性述語か、従属節の主語が非情物か有情物かといった従属節の構文要素を考慮しなくてはならないケースがある。主節の構文要素への配慮も必要となる場合もあるが、主に文末のモダリティ形式との関わりといった点に反映される。

一方中国語は、形態の拘束を受けず、多種多様な表現形式があり、一文に多数の接続表現を用いることができるが、接続表現の位置への配慮が必要である。従属節で用いられる接続表現は、主節と同主語の場合、主語の前か後ろかといった位置的な制約を受けにくい。主節と異なる主語の場合、接続表現の位置が主語の前でなければならない。

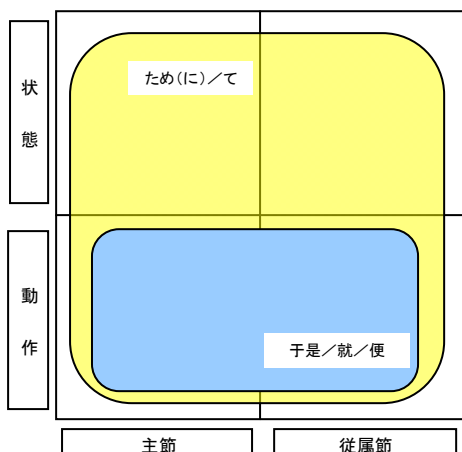
中国語は、主節で用いる接続表現の種類が多く、位置的には主語の後ろに制限されているものと、主語の制約を受けないものの2種類に分かれる。また、主節のアスペクトが已然か未然か、表現内容が意志的な行為であるかどうかにより制約を受けるケースもある。動的原因関係を表すものが使用される場合は、主節が已然のアスペクトであると同時に、動的表现でなければならない。主節が行為である場合、主節に接続表現の使用が必須となる。

4.3 接続表現の機能的な異同

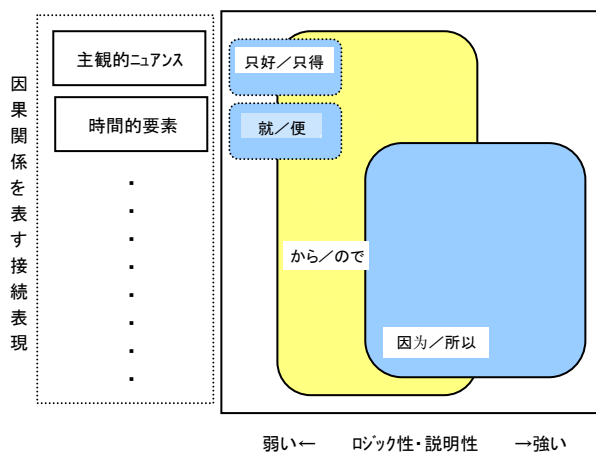
因果関係を明示的に示すものは、ニュアンス的な違いを抜きにすると、日本語では「から・ので」の使用範囲が広いのに対して、中国語は“因为”“所以”の使用範囲が最も広い。日本語の「から・ので」には原因・理由を表す以外の機能もあるが、前後節の意味関係を表す上では、専ら因果関係を表す。一方、「ため(に)」「て」は、因果関係を表す複文に使用されるだけでなく、それぞれ他の意味関係を表す機能も有している。複数の意味関係を表す機能を持つものを用いて、因果関係を表す場合、ニュアンス的には、専ら因果関係を表す「から・ので」との違いがあり、因果関係を表す複文における使用条件は「から・ので」より厳しい。

中国語においても、同様の傾向がある。中国語では、“因为”“所以”などが因果関係を表す機能のみを持ち、因果関係を表すものとして曖昧なところがないため、使用条件がゆるく、ニュアンス的な効果を求めなければ、使用範囲もかなり広い。一方、“于是”“就”“便”の場合、“于是”は因果関係を表す機能を持ちながら、継起関係を表す機能も持って

いる。“就／便”は因果関係を表す複文だけではなく、条件複文にも用いられる。こういった多種の複文の中で用いられるものは、因果関係を表す場合、機能が因果関係のみを表す“因为”“所以”などより狭くなってしまい、使用条件が厳しい。両言語の接続表現の機能的な異同を【図5】【図6】のように図示する。本文では【図26】【図27】になっている。



【図5】日中の継起性に従う接続表現の機能的な相違



【図6】日中の因果関係のみ表す接続表現の機能的な相違

4.4 因果関係を表す複文におけるマーカーの多様化、自由化の相違

日本語は形態を重視しているため、接続表現をはじめ、焦点マーカー、時間表現がすべて定形化されている。一方、中国語は形態を重視しないため、接続表現をはじめ、焦点マーカー、アスペクトマーカー、推量マーカーのいずれも単数で使用したり複数で使用したりする場合がある。従属節のみに使用するもの、前後節同時に使用するものなど、多種多様であり、組み合わせがバラエティに富んでいる。要するに、日本語の各種のマーカーの形式は単一であり、決まった型にはめ込むようであるが、中国語の各種のマーカーの表現形式は融通がきき、形が決まっておらず、自由に組み合わせられるということである。

日本語では形態化を重視し、構文上は各種のマーカーが定型化された印として用いられるのに対して、中国語は、語彙による表現形式が多く、各種のマーカーの使用は、形式に拘泥せず、単数でも、複数でも特に限定されておらず、分散的に従属節と主節に蒔かれ、それぞれの機能を果している。

5. 今後の課題

本研究は因果関係を表す接続表現を対象として、日中対照の立場から記述的な研究を行った。因果関係を表す接続表現におけるいくつかの研究課題を設定し、両言語のそれぞれの特徴について検証した。

結論としては、両言語において、因果関係を表す複文に関する認識に違いがあり、因果関係を表す複文の枠組みが異なっていることを明らかにした。また、接続表現の使用上の制約、機能、自由性、多様性に関して、両言語における相違点と類似点も判明した。

本研究を通して、因果関係を表す接続表現における両言語の特徴や様々な類似点と相違点を究明したものの、残されている課題はまだ多くある。本研究では、方法論として、文学作品における地の文を中心に検討し論証したため、両言語の因果関係を表す接続表現に潜む特徴を見出せない部分が存在していることが否めない。また、因果関係は単なる節と節のレベルの因果関係だけではなく、文と文との因果関係にもある。したがって、今後調査資料の範囲をさらに広げ、文章・談話レベルにおける両言語の因果関係を表す接続表現に関する対照研究を行うことも求められる。そして、文章・談話レベルにおける日中両言語の因果関係を表す接続表現の対照研究を通して、日中両言語の広範な因果関係の特徴、体系を明らかにすると同時に、両言語の因果関係を表す接続表現の意味機能などについても究明する。また、因果関係を表す接続表現は他の意味関係を表すものとの関わり方、多重複文における相互の包含関係などについても考察する必要がある。

今回の研究結果を入り口として、今後、因果関係に関する研究の枠組みを更に拡大し、両言語の因果関係の諸相、因果関係に関する捉え方、構造上の相違、構文諸要素との関連性等を究明していくことによって、両言語の因果関係の全体像を浮き彫りにすることを目指したい。